



ロゴデザイン：加藤賢策（ラボラトリーズ）

東アジア文化都市2018金沢

変容する家

Altering Home

2018年9月15日(土)～

11月4日(日)

出品作家22組が決定！ 日中韓のアートと出会う まちなか展覧会

展覧会名	東アジア文化都市2018金沢 変容する家 / 家的变迁 / 변용하는 집 / Altering Home
会期	2018年9月15日(土)～11月4日(日)
開場時間	10:00～17:00 ※会場により異なる場合があります
休場日	毎週月曜日(ただし、9月17日、24日、10月8日は開場)、9月18日、25日、10月9日 ※会場により異なる場合があります
会場	金沢市内(広坂エリア、石引エリア、寺町・野町・泉エリア)
料金	入場無料
出品作家	川俣正 / ス・ドホ / オーギカナエ / ギムホンソック / ソン・ドン / 山本基 / ムン・キョンウォン & チョン・ジュンホ / チウ・ジージエ / ミヤケマイ / 伊能一三 / 宮永愛子 / ハン・ソクヒョン / 呉夏枝 / さわひらき / チェン・ウェイ / 風景と食設計室 ホー / 魚住哲宏+魚住紀代美 / ヤン・ヨンリャン / リ・ビンユアン / 村上慧 / イ・ハンソル / グウ・ユルー
企画	金沢21世紀美術館(黒澤浩美、中田耕市、高橋律子)
主催	東アジア文化都市2018金沢実行委員会 / 金沢市
共催	金沢21世紀美術館[公益財団法人金沢芸術創造財団]
協賛	小松精練株式会社 / ソフトバンク株式会社 / 太陽工業株式会社 / パナソニック株式会社 アプライアンス社 / 株式会社福光屋 / 北陸製菓株式会社 / 株式会社丸八製茶場 / 株式会社ユポ・コーポレーション
協力(予定)	野町町会連合会 / 弥生町会連合会 / 泉野校下町会連合会 / 新竪町校下町会連合会 / 小立野町会連合会 / 野町公民館 / 弥生公民館 / 城南公民館 / 新竪町公民館 / 小立野公民館 / 野町・弥生地区商店街連盟 / 広坂振興会 / 石引商店街振興組合 / 社会福祉法人第一善隣館 / 釜山現代美術館
お問合せ	金沢21世紀美術館 TEL 076-220-2800

平成30年度 文化庁 文化芸術創造拠点形成事業

本資料に関するお問合せ 金沢21世紀美術館 事業担当：黒澤、中田、高橋 広報担当：落合、石川
〒920-8509 金沢市広坂1-2-1
TEL 076-220-2814 FAX 076-220-2802
<http://www.kanazawa21.jp> E-mail: press@kanazawa21.jp



展覧会概要

我々の生きる現代では「家」は一つの社会システムとして構造化されています。建築的・物理的な「家」は一般化しやすいのですが、表面化しない感情、慣習や文化全般に融解している「家」は、多角的に考察されなければ、その意味を捉えることは困難です。とりわけ、グローバル化によって移動が常態化した今日において、人々の「家」はどこにでも、いくつもあるのか、あるいはどこにもないのか。この問いを起点に、金沢の街なかに存在する使われていない日常空間を探し出し、日本・中国・韓国の現代美術作家が「家」をテーマに作品を発表します。



1
【参考画像】ハン・ソクヒョン《Super-Natural》(部分) 2011/2016
Installation view of the exhibition "Megacities Asia" at the Museum of Fine Arts, Boston.
Courtesy of the artist



2
【参考画像】ソン・ドン《Mirror Hall》2016-2017
Courtesy of the artist

展覧会の特徴

**世界の現代アートを牽引するアーティストから注目の若手、
金沢ゆかりのアーティストが参加**

現代アートシーンで存在感を増す東アジア諸国。本展では、さまざまな国際舞台で作品を発表してきた川俣正（日本）、ソン・ドン（中国）、ムン・キョンウォン & チョン・ジュンホ（韓国）をはじめ、日本・中国・韓国を代表するアーティストが金沢に集結します。また、山本基、伊能一三、さわひらきなど、金沢ゆかりのアーティストや、注目の若手アーティストまで幅広く紹介します。

金沢のまちが舞台**「家」をテーマに展開し、まちとの交流から生まれる新作も発表**

金沢21世紀美術館を飛び出して、市街地で作品を展示します。金沢市内の3つのエリア（広坂、石引、寺町・野町・泉）にある民家やビルなどを会場に、本展のための新作も多数発表される予定です。当館のミッションである「まちに生き、市民とつくる、参画交流型の美術館」をさらに展開し、地域との交流を進めながら実施します。なお、展覧会を行う3つのエリアは、古くは藩政期、金沢城のお膝元として、あるいは加賀藩主前田家ゆかりの寺院群が置かれるなど、いずれも藩政の要所とされてきた地です。現在は、官庁街や文教地区、観光地として多くの人に親しまれる一方、地元の人々の生活が息づく地域でもあります。

東アジア文化都市2018金沢 コア事業

「東アジア文化都市」は、日本・中国・韓国の3か国において文化芸術による発展を目指す都市を選定し、その都市において現代の芸術文化や伝統文化、また多彩な生活文化に関連する様々な文化芸術イベント等を実施するものです。2018年は金沢（日本）・ハルビン（中国）・釜山（韓国）の3都市において開催します。本展は金沢のまちを舞台とした大規模な現代アートの展覧会であり、この「東アジア文化都市」のコア事業として、「世界の現在（いま）とともに生きる」をミッションに掲げる当館が企画します。



【参考画像】川俣正《「工事中」再開》2017
アートフロントギャラリーでのインスタレーション（東京、代官山）
撮影：井上玄
© Tadashi Kawamata

展示エリアについて

広坂(ひろさか)

金沢市の中心にある官庁街で、当館のほか、市役所や石川県政記念しいのき迎賓館(旧県庁)、金沢城址や兼六園に隣接しています。兼六園の南側の広い坂道が名前の由来とされ、藩政期には武家屋敷が並んでいたといわれています。また明治以降、かつては第四高等学校、石川県女子師範学校などが配置されていた文教地区でもありました。現在大通りには、商店がならび観光客をはじめ多くの人が行き交います。

石引(いしびき)

石引の名は金沢城の石垣を築くため、江戸時代初期に戸室山麓から掘り出した石を引いて運ぶための道であったことに由来します。小立野台地の先端に位置する金沢城にむけてまっすぐ貫かれた道沿いに、現在では、金沢美術工芸大学などの教育機関や、大学病院などの医療機関、前田家ゆかりの寺院が集められた小立野寺院群、老舗やユニークなお店がならぶ商店街などがあります。加賀藩との深いつながりがいまでもそこかしこに感じられる場所であり、これまで多くの学生たちを受け入れてきた地域でもあります。

寺町・野町・泉(てらまち・のまち・いずみ)

犀川の西南に位置するのが、寺町・野町・泉エリアです。野町は金沢三大茶屋街のひとつである「にし茶屋街」があるほか、寺町寺院群や、古くからの建物や街並みがしっかりと残っています。泉は、清らかな泉が多数湧き出していた地であったといわれています。参勤交代でも利用されるなど、日本海側の主要な街道であった旧北國街道が通り、いまでもその名残を感じることができます。

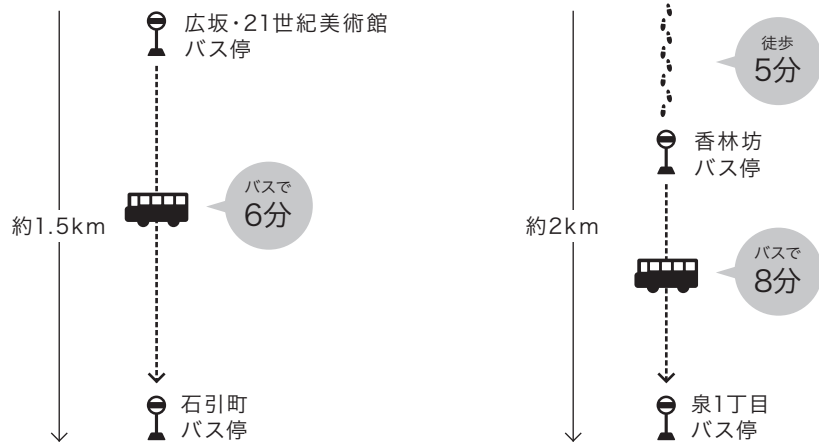


東アジアのアーティスト22組が考える「家」を訪ねて、散歩に行こう！
一日ゆっくりと散歩しながら、作品とまちの魅力を発見してください。

広坂エリア・金沢21世紀美術館（2会場）

21 

金沢21世紀美術館の芝生広場のほか、
近隣のビルをまるごと使ったダイナミックな展示
展示予定作家 川俣正、ミヤケマイ



石引エリア
(6会場)

石引商店街周辺に、まちの人々の日々の生活に寄り添うような作品を紹介

展示予定作家

オーギカナエ、ギムホンソック、山本基、
呉夏枝、風景と食設計室 ホー、ヤン・ヨ
ンリャン、村上慧

寺町・野町・泉エリア
(10会場)

元工場や寺院、町家などそれぞれの物語や特徴ある空間を生かした展示

展示予定作家

ス・ドホ、ソン・ドン、ムン・キョンウォン
& チョン・ジュンホ、伊能一三、ハン・ソ
クヒョン、さわひらき、チェン・ウェイ、魚
住哲宏+魚住紀代美ほか

出品作家



photo: Riccardo Piccirillo

川俣正 KAWAMATA Tadashi

1953年北海道生まれ。1979年東京藝術大学美術学部油画科卒業、1984年同大学博士課程満期退学。1982年のヴェネチアビエンナーレをはじめ、1985年「PS1 プロジェクト」(ニューヨーク)、1987年と1992年のドクメンタ(カッセル)、1987年のサンパウロビエンナーレなど国内外で多くのプロジェクトや展覧会に参加。廃材を仮設する手法で建造物や廃墟など周囲の環境と積極的に関係し、その意味を引き出したり異化したりする作品で高い評価を受ける。2005年横浜トリエンナーレ総合ディレクター。2007年よりパリ国立高等美術学校教授を務める。

Courtesy of the Artist,
Lehmann Maupin,
New York/Hong Kong and Seoul

ス・ドホ SUH Do Ho

1962年ソウル(韓国)生まれ、ロンドン(英国)、ニューヨーク(米国)、ソウル在住。家(ホーム)、物理空間、移動、記憶、個人、集団などへの問いに対して、ドローイング、映像、彫刻など多様なメディアを用いて作品を発表している。かつて作家自身が住んだ韓国、ロードアイランド、ベルリン、ロンドン、ニューヨークの家を原寸大で再現した布の彫刻作品が最もよく知られている。身体的・比喩的な形の空間の展性に関心を持ち、身体がその空間とどのように関係し、存在し、相互作用するのかを考察する。特に家庭の空間と、特定の場所、形、歴史を持つ建築を通じて、ホームの概念を表現する方法に興味を持つ。作家にとっては、私たちが居住する空間にも心理的なエネルギーが含まれており、地理的な位置にとらわれない、記憶、個人的な経験、安心感を示し、作品で視覚化する。



オーギカナエ OHGI Kanae

1963年佐賀県唐津市生まれ、福岡県久留米市在住。1984年武蔵野美術短期大学美術科油絵専攻卒業後、東京を中心に大型インスタレーションを制作発表する。インド、シンガポール等で既存の建物の壁を使ったサイトスペシフィックな作品を制作。拠点を東京から福岡に移し、建築の内外につくるパブリックアートや食を使ったワークショップを多く行う。出自に関わる明治から昭和初期にかけて活躍した茶人で数寄屋建築家の仰木魯堂、茶人で木工芸家の仰木政斎にちなみ、思わず心を緩めたい巨大なイエロースマイルの茶室をOpenART Biennale 2017(オレブ口)に出品し、市民を巻き込んでの茶会も行う。

こどもの美術活動「手で考える」や彫刻家牛嶋均とのユニット「YAPPOTUKA」(ヤポッカ)なども展開している。



ギムホンソック Gimhongsok

1964年ソウル(韓国)生まれ、同地在住。主な展覧会にREDCAT(ロサンゼルス)、アートソングセンター、サムスン美術館プラト(ともにソウル)などでの個展、ヴェネチアビエンナーレ、イスタンブールビエンナーレ、光州ビエンナーレ、リヨンビエンナーレ、アジア太平洋現代美術トリエンナーレ(ブリスベン)、横浜トリエンナーレなどの国際展、ウォーカーアートセンター(ミネアポリス)、ハイワードギャラリー(ロンドン)、ロサンゼルスカウンティ美術館、ヒューストン美術館、森美術館、金沢21世紀美術館、グッゲンハイム美術館(ニューヨーク)などでのグループ展がある。



ソン・ドン SONG Dong

1966年北京(中国)生まれ、同地在住。1989年首都師範大学美術学部を卒業。パフォーマンス、ビデオから写真、演劇、彫刻と多岐にわたる制作を通じて、人間の努力の非永続性や儚さを明らかにする。2009年にMoMA(ニューヨーク)で個展開催。モスクワビエンナーレ、ドクメンタ、ヴェネチアビエンナーレ、リバプールビエンナーレ、光州ビエンナーレ、サンパウロビエンナーレ、イスタンブールビエンナーレ、アジア太平洋現代美術トリエンナーレ、広州トリエンナーレ、台北ビエンナーレを含む、数多くの国際展で作品を発表している。



Photo: Stefan Worring

山本基 YAMAMOTO Motoi

1966年広島県生まれ、石川県金沢市在住。1995年金沢美術工芸大学卒業。若くしてこの世を去った妻や妹の思い出をテーマに、床に塩で巨大な模様を描く。展示後は鑑賞者と共に作品を壊し、塩を海に還すプロジェクトを実施。金沢21世紀美術館の他、MoMA PS1、エルミタージュ美術館（サンクトペテルブルク）、東京都現代美術館等で作品を発表している。



ムン・キョンウォン & チョン・ジュンホ MOON Kyungwon & JEON Joonho

ムン・キョンウォン MOON Kyungwon 1969年ソウル（韓国）生まれ。
 チョン・ジュンホ JEON Joonho 1969年釜山（韓国）生まれ。
 ムン・キョンウォンとチョン・ジュンホによるデュオ。近年、学際的なプラットフォームをつくることに焦点を当てた共同プロジェクト「News From Nowhere」を活動の中心としている。最初のサイトスペシフィックな共同作品を2012年のドキュメンタで発表。主な個展に2013年「News from Nowhere」シカゴ美術館附属美術大学、2015年ミグロス現代美術館（チューリッヒ）、「The Ways of Folding Space & Flying」ヴェネチアビエンナーレ 韓国館、2017年「Freedom Village」スカイ・ザ・バスハウス（東京）などがある。



チウ・ジージェ QIU Zhijie

1969年福建省（中国）生まれ、北京および杭州（中国）在住。アーティスト、キュレーター、文筆家、教育者として活躍。アーティストとしては写真、ビデオ、書、絵画、インスタレーション、パフォーマンスが融合する作品を発表するなど、境界にとらわれない活動を展開してきた。国家的モニュメントへのアプローチをもとに、近代化の大きなうねりのなかで国家と個人の夢と現実が交錯するさまを明らかにした「南京長江大橋プロジェクト」（2009年に北京のユレンス現代美術センターにて発表）は代表作と言えるものである。2017年のヴェネチアビエンナーレでは、展覧会「Continuum — Generation by Generation」のキュレーションを担当した。



Photo: Satoshi Shigeta

ミヤケマイ MIYAKE Mai

美術家・京都造形芸術大学客員教授。日本の伝統的な美術や工芸の繊細さや奥深さに独自のエスプリを加え、過去・現在・未来をシームレスにつなげながら、物事の本質や表現の普遍性を問い続ける。一貫した、たおやかな作風でありながら、鑑賞者の既成の価値観をゆさぶり、潜在意識に働き掛けるような作品で高い評価を得る。2008年École Nationale Supérieure des Beaux-Arts（パリ国立美術大学大学院）に留学。羽鳥書店から出た『膜迷路』に続き、2017年4冊目の作品集『蝙蝠』を上梓。2018年SHISEIDO THE STOREショーウィンドウのアートディレクターに就任。



伊能一三 INO Ichizo

1970年神奈川県生まれ、石川県金沢市在住。2000年東京藝術大学大学院美術研究科漆芸専攻修了。2005年金沢卯辰山工芸工房修了。2011年「Urushi-traditionelle japanische Lackkunst」Musterring International (ドイツ)、2014年「Collect 2014」サーチギャラリー (ロンドン)、2016年「2016 福州国際漆芸ビエンナーレ」福州漆芸研究院 (中国)、「International Contemporary Otchil Art Exhibition 2016」統営漆美術館 (韓国) など国内外で作品を発表している。

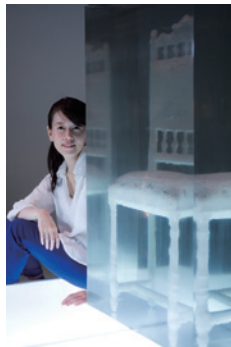


Photo: MATSUKAGE
Courtesy of Mizuma Art Gallery

宮永愛子 MIYANAGA Aiko

美術家。1974年京都府生まれ、神奈川県横浜市在住。2008年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、塩、陶器の貫入音や葉脈を使ったインスタレーションなど、気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める。2013年「日産アートアワード」初代グランプリ受賞。主な個展に2018年「life」ミヅマアートギャラリー (東京)、2017年「みちかけの透き間」大原美術館有隣荘 (岡山)、2012年「宮永愛子：なかそら一空中空一」国立国際美術館 (大阪) など。



Photo: Qrim Ahn

ハン・ソクヒョン HAN Seok Hyun

1975年ソウル (韓国) 生まれ、ソウルおよびベルリン (ドイツ) 在住。2008年韓国国立芸術大学にて修士号 (MFA) を取得。ドイツ、スコットランド、米国、韓国を含む世界各地で作品を発表。ポストン美術館、北ソウル美術館、トータル美術館 (ソウル)、浦項市立美術館、京畿道現代美術館、イルミン美術館 (ソウル) 等の美術館の展覧会に参加。2017年に韓国文化芸術委員会から助成を受けカラチビエンナーレ (パキスタン) に参加。



Photo: Toshie Kusamoto

呉夏枝 OH Haji

1976年大阪府生まれ、オーストラリア在住。2012年京都市立芸術大学博士号取得。染織、刺繍、編む、結ぶなどの技法と、写真、テキスト、音声などの媒体を用いたインスタレーション作品を制作。コリアンディアスポラとして、無名の人々の語られなかった歴史や時間を浮かび上がらせていく。近年では、海路を手がかりに個人の物語を「私たち」の記憶として共有するためのプロジェクトに取り組んでいる。



さわひらき SAWA Hiraki

1977年石川県生まれ、ロンドン（英国）在住。2003年ロンドン大学スレード校美術学部彫刻科修士課程修了。心象風景や記憶の中にある感覚といった実体のない領域を、映像・立体・平面などを巧みに操り構成したビデオインスタレーションで表現する。現実にはありえない光景を描きながら、どこか親しみを感じさせる世界を展示空間に生み出し、見る人の想像力に働きかけるような作品を発表し続けている。



チェン・ウェイ CHEN Wei

1980年浙江省（中国）生まれ、北京（中国）在住。チェン・ウェイは中国の一人っ子政策、改革開放政策以後に生まれた「80後」世代を代表するアーティストのひとりとして、劇的な経済成長と空前の不動産投資ブームがつくりだした中国社会の幻像と実態とのギャップを、主に写真やLEDというメディアを用いて写し出し、社会に対する個人の視点の在処や、世界と個人との関係を客観的かつ鋭敏に問い直している。

Courtesy of the artist and Ota Fine Arts, Shanghai / Singapore / Tokyo



Photo: Yasuhiko Kouyama

風景と食設計室 ホー

HOO. Landscape and food works

高岡友美 TAKAOKA Tomomi 1981年生まれ。

永森志希乃 NAGAMORI Shikino 1980年生まれ。

高岡友美と永森志希乃によるユニット。ランドスケープデザイン事務所勤務を経て、2012年3月より活動。「遠くの風景と、ひとさじのスープ。世界とわたしの手のひらは繋がっている」をコンセプトに、食を風景・文化・社会の切り口から捉え、その時その場所でしか体験できない食のインスタレーションを展開。



魚住哲宏+魚住紀代美

UOZUMI Tetsuhiro + UOZUMI Kiyomi

魚住哲宏 1980年愛知県生まれ。2007年愛知県立芸術大学大学院彫刻専攻修了。

魚住紀代美 1981年和歌山県生まれ。2004年京都造形芸術大学美術工芸学科彫刻専攻卒業。

2004年から共同制作を開始、2007年にベルリンに移住。2012年のアイスランドでのレジデンス以降、日常の些細な出来事を集めること、再構成することをテーマに作品を作っている。会場に詰め込まれた物語を来場者が自由に組み合わせることで、そこにしか無い個々の視点で物語を再生させていく。



ヤン・ヨンリャン YANG Yongliang

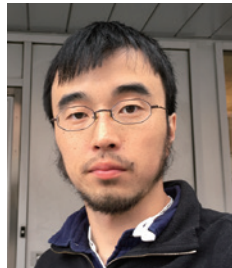
1980年上海（中国）生まれ、同地在住。幼少期より中国の伝統的な絵や書道の訓練を受け、2003年中国美術学院視覚コミュニケーション科（上海）を卒業。近代の言語とデジタル技術で伝統的な芸術と現代、古代の東洋美学と文学者たちの信念を結びつけることを試みている。

数々の美術館、国際展で作品を発表しているほか、大英博物館、ブルックリン美術館、ハウアート美術館（上海）、メトロポリタン美術館、ボストン美術館、サンフランシスコアジア美術館を含む、20以上の公共機関で作品が収蔵されている。



リ・ビンユアン LI Binyuan

1985年湖南省永州（中国）生まれ、北京（中国）在住。2011年中央美術学院彫刻科を卒業。作品の多くは、展示会場や観客を有さない日常生活の中で行われる即興パフォーマンスである。断片化した個々の活動は、伝統的、普遍的な経験と区別され、独自の表現をつくり出す。MoMA PS1、フローニンゲン美術館（オランダ）、Museum of Old and New Art（タスマニア）など多くの美術館で作品を発表。



村上慧 MURAKAMI Satoshi

1988年東京都生まれ。2011年武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。2014年より自作した発泡スチロール製の家に住む「移住を生活する」プロジェクトを始める。内省を反転させて社会的なアクションに変換する方法を探している。著書に『家をせおって歩く』（福音館書店）及び『家をせおって歩いた』（夕書房）がある。



イ・ハンソル LEE Hansol

1989年釜山（韓国）生まれ、釜山およびソウル（韓国）在住。社会の中で孤立した個人と、個人を取り巻く社会との関係を追求している。孤立という概念的な形態を知覚の形態に整理し、個々の孤立から社会的隔離への拡大を試みる。近年では、2017年個展「Impermanence Act」Open Space Bae（釜山）を開催、同年グループ展「Crossover」FreeS Art Space（台北）に参加。



グウ・ユルー GE Yulu

1990年湖北省武漢（中国）生まれ、北京（中国）および武漢在住。2017年中央美術学院実験芸術科で修士号を取得。公共空間での個人の抵抗を題材にしている。極端なパフォーマンスを実践することによって、関連するトピックについての議論のきっかけとなることや、干渉を生み出すことで一般市民の参加を呼び起こすことを試みる。2016、2017年中央美術学院美術館（北京）、2017年 Luo Zhongli 美術館（重慶）、湖北美術館などの展覧会に参加。

広報用画像

画像1～3を広報用にご提供いたします。

ご希望の方は下記をお読みの上、広報室へお申し込みください。

Email: press@kanazawa21.jp

[使用条件]

※広報用画像の掲載には各画像のキャプションとクレジットの明記が必要です。

※トリミングをご遠慮ください。作品が切れたりキャプション等の文字が画像にかぶったりしないよう、レイアウトにご配慮ください。

※情報確認のため、お手数ですが校正紙を広報室へお送りください。

※アーカイブのため、後日、掲載誌（紙）、URL、番組収録のDVD、CDなどをお送りください。以上、ご理解・ご協力のほど、何とぞよろしくお願いたします。